戦争とジェンダーの関係から見る真の平和の意味

長谷川　晋

こんにちは。私は関西外国語大学准教授の長谷川晋と申します。よろしくお願いします。

本日は、宗教講座の一貫として、私の専門である「国際関係論」という学問の観点から戦争についてお話してくださいというご依頼でしたので、私の専門はより狭い範囲では「平和構築論」とか「紛争解決論」になりますが、その観点から戦争について、何かみなさんの関心になるようなことをお話しできればと思っております。

現在、ウクライナでも戦争が続いておりますけれども、多くの方々がその戦争の帰趨について大きな関心を持っております。国際関係論という学問自体も、そもそも何で戦争が始まるのか、ということを分析するために始まった学問ですから、当然、国際関係論の専門家の方たちは、戦争の始まった原因について様々な観点から分析をしています。ただ、

戦争はなぜ起きるのかという非常に大きいトピックを、一回の講義で全て話せるとは思いませんので、より狭い範囲に限定して今日はお話しさせていただきたいと思っております。

戦争の当事者の方たちがよく言う言葉として、「愛する家族を守るために戦っているんだ」「愛する故郷、愛する国を守るために戦っているんだ」というものがありますが、実際にその戦争によって一番大きな犠牲を受けているのは誰か。本来、戦っている方たちが守ろうとしている、最も力の弱い人たち、特に女性と子どもたちに戦争の被害が集中しているという厳しい現実があります。なぜこのようなことが起こるのかを考えなくてはならないのですが、今日は特にジェンダーの観点から、戦争がもたらすものについて考えてみて、我々が当たり前だと考えている、漠然としたイメージを持っている「平和」というものについて、もう一度その根底から、前提から、考え直してみようと、そういう問題提起をするような内容にしてみたいと思います。

本日は、まず、ウクライナで起こっている戦争について考えてみたいのですが、先にある動画を見て欲しいと思います。ある国際ＮＧＯが現地で活動していて、そこで撮った映像を公開していますので、まずはウクライナの現実を見てください。

（映像）

動画でウクライナの現状を見ていただきました。やはり目立つのは、夫と別れて、子どもを抱えて逃げ惑うお母さんの姿だと思うんですけれども、先ほども申し上げました通り、戦争の犠牲や被害が最も非力な弱い立場にある人たちに集中している。一番しわ寄せが来ている現実が厳然としてあるわけです。当然、逃げ惑っている中で軍隊から攻撃を受けた場合には、ほとんど抵抗できずに暴力にさらされる。もちろんウクライナだけではありません。これが世界で起こっている戦争の現実です。

ここでジェンダーの話に行く前に、そもそも戦わなくてはいけない戦争というものが存在するのかどうか、という問いかけに対して、国際関係論で行われている議論を一つ紹介したいと思います。それが「正戦論」と呼ばれるものです。戦争に対して両極端の二つの立場があるんですね。一方は、絶対に武力行使をしてはならない、相手が武力行使をしてきたとしても、それに対して相手と同じように暴力で応酬してはならない、どのような理由・状況であれ、絶対に武力行使してはならない。これが「絶対的平和主義」と呼ばれる

【理念の対立軸】

「どのような理由・状況であれ、絶対に武力行使してはならない」（絶対的平和主義）

ex. 広島平和記念資料館、「最も正しい戦争よりも、最も不正な平和を私は選ぶ」（キケロ）

⬆⬇

「人の苦しみはそれを見た者に義務を負わせる。どのような結果になろうとも見殺しにはできない」（絶対倫理）

ex. ホロコースト博物館

※「どのような結果になろうとも」というのは命を失う可能性もあるという意味。

考え方です。他方で、自分の大切な人たちが苦しんでいるのを見てしまった以上、何もしないということありえない、仮に自分に危害が及ぶことがあったとしても傍観することはありえない、という考え方がもしあるとすれば、もう一方の「絶対倫理」と呼ばれる方に分類できると思います。例として挙げられていますのは、みなさんの中にも行かれたことがある人がいるかと思いますが、広島の平和記念資料館です。ここでは原爆の悲惨な被害が展示されています。慰霊碑にも「あやまちはくりかえしません」と書かれています。人類が犯してしまった愚かな過ち、戦争を私たちはくり返さないと宣言しているわけです。そこには、戦争に良いも悪いもない、戦争は全てを地獄に変えてしまって、それを起こすこと自体、絶対に避けなくてはならない、という考え方が現れています。あらゆる武力行使、戦争というものは「悪」であるという考え方が反映されていると考えることができます。他方、「絶対倫理」は、人の苦しみはそれを見たものに義務を負わせる。一旦、人が苦しんでいるのを見た

ら助けないわけにはいかない、どのような結果になろうとも見殺しにはできない、という考え方です。「どのような結果になろうとも」がポイントなんですけれども、要するに、自分が命を失う可能性もあるということです。誰かを助けるために戦った結果として、自分も命を失う。そのリスクも含めた上で、でも、何もしないのはありえない、という考え方に立っています。そこに、ホロコースト博物館の例が挙げられています。世界中にあるホロコースト博物館では、同じように悲惨な展示がされているんですけども、そこを訪れた人たちが、その博物館から出てきた後に受け取るメッセージは、広島の平和記念資料館とは大きく異なっています。私も実際に行ったことがあるんですけど、ユダヤ人がホロコーストで受けた被害、犠牲、が様々な形で展示されています。それを見た人が最終的に受け取るものは、「戦争はくり返してはいけない」という広島の原爆資料館とは違って、ここまで悲惨な犠牲を強いられて、黙って、甘んじて、その犠牲を受け入れるということは考えられない。いざとなったら、剣を、武器を、手にとって戦わなければいけないんだ、というメッセージです。要するに、戦うべき戦争はあるんだという考え方です。広島が、どんな戦争であれ悲惨であることには変わりはないから、良い戦争も悪い戦争もないんだと、正しい戦争、正しくない戦争もないんだと、そういう分類自体ない、という前提に立

っているのに対して、ホロコースト博物館は違うということです。これは両極端な考え方かもしれませんが、多くの人たちはその両極端の間で、どちらかに寄ったり、離れたり、という立場を取っていると思います。考え方として、この二つの対立軸があるということです。国際法上では開戦法規、交戦法規が定められていますけれども、戦争が起こってしまったとして、ある一定の基準をクリアしていたら、積極的に正当化されているわけではありませんけれども、それは戦ってもいたしかたない状況だと、消極的には認められているという側面があります。ただ、われわれは、実際に戦争を体験した人たちも含めて、戦争にはいろんな考え方を持っていますし、絶対的平和主義の立場を取っている人たちもいると思います。現在のウクライナの、先ほど動画で見ていただいた紛争に関しても、自分たちの家族を守るために戦わないといけないんだと、今、自分たちは侵略を受けていて、単にやられっぱなしで逃げ惑うだけではダメなんだという考え方が出ています。その戦っている人たちにとっては当然、それは正しい戦争、戦うべき戦争という考え方があるわけです。それは「絶対倫理」の考え方に近い立場で戦争を見ていることになります。なので、お互いに、これは戦わなくてはいけない戦争だと正当化している場合、ロシアにはロシアの考え方があって、ウクライナにはウクライナの考え方があって、それぞれが、それ

ぞれの根拠で戦争を正当化している場合、当然その戦争はいつまで経っても終わらない、むしろ長引く可能性があります。自分の大切な人たちを守るために戦う結果として、自分たちが一番守りたい人たちが受ける犠牲もどんどん長期化してしまう、という矛盾が起こってしまうのが戦争の現実だと思います。こういった対立軸が国際関係論の中で議論されています。

では続いて、ジェンダーの観点から戦争の犠牲について考えていきたいと思います。先ほど、戦争の被害として、力の弱い人たち、特に女性と子どもに一番しわ寄せが来てしまっている、ということをお話しましたけれども、それをいくつか、ウクライナ以外の事例でも見ていきたいと思います。

まずはイラクの例です。イラクには一九九一年に湾岸戦争、それから、二〇〇三年にはアメリカが攻撃をしたことによって始まったイラク戦争があります。それでフセイン政権は崩壊したんですけれども、それ以前にも長らく戦争をしていて、特に一九八〇年から一九八八年にかけて八年にもわたって行われたイラン・イラク戦争では、非常に大きな経済的な損失を受けたんですね。もちろん経済的損失だけではなくて、人的損失も大きかった。それによって戦費が増大、国際社会からも経済制裁を受けたことで、経済的余裕がな

くなって、戦争以前、イラク政府は女性の社会進出を奨励していたんですけれども、男性の雇用を確保するために女性に仕事を辞めるよう命令した、という現実があります。男性を優先させるべきだという考え方に基づいて、自分の意思で働いている女性たちを職場から追放する措置をとったわけです。その結果として、女性は、物資不足、貧困、医療・教育の質低下によって生活環境が悪化する事態になりました。女性より男性を優先すべきだという考え方がある国では、戦争が終わった後でさえも、女性は社会の周縁に追いやられて、非常に厳しい現実を受け入れさせられているということです。

もう一つは性暴力の問題です。これはいろんな所で見られますし、現在のウクライナの戦争でも各地で起こっていると報告されていますが、九〇年代の紛争でもそういうことがたくさん起こっていました。分類としては、個人や少数の集団が自分たちの判断で勝手に行っている性暴力と、より深刻な二つ目は、軍隊や特定の集団が組織的に行っている、戦略、武器の一つとして行っている性暴力です。例えば、かつてユーゴスラビアという国がありました。内戦が起こっていくつかの国に分裂してしまったんですが、三つの民族がお互いに殺し合ったんです。そこで共有されていた考え方は、敵に屈辱を味わわせるために、敵側が大切にしているもの辱める、というものです。敵が守ろうとしている女性を辱

めることによって、敵に「大切なものを守れなかった」という屈辱感、精神的ダメージを受けさせる。女性の身体は「民族のしるし」と見なされて、敵対する民族による攻撃の対象とされたわけです。もちろん、ユーゴスラビアだけではありません。いろんな所で起こっている現実がありますし、現在のウクライナとロシアでも、こういった、いわゆる戦争犯罪が行われています。

今のスライドで、戦争の犠牲がジェンダーの観点から見ると、女性に偏っている、主として男性が始めた戦争によって最も大きな被害を受けているのは女性の方だということを、いくつかの事例で見てきました。ここで、よりジェンダーについて深く考えるために、ジェンダーの定義、ジェンダーって何なのか?を確認しておきたいと思います。

ジェンダーの問題に関しては様々なところで取り上げられていますし、ジェンダーの平等もいろんな所で唱えられていますので、みなさんの中にもこの問題に非常に強い関心を持っている方もいらっしゃると思います。むしろ若い世代に、他人事ではなくて、直接自分に関係している問題として、真剣に考えていらっしゃる方々もいると思います。そのジェンダーが国際関係論の中でどういう議論のされ方をしているのか、それが戦争の中で、これまで我々が意識しなかった見方をどのように変えてくれるのか、異なった観点を提示

しているのか、を順番に見ていきたいと思います。

まず、ジェンダーがどういうものなのか、定義から確認しておきたいので次のスライドを見てください。男性と女性、性差と呼ばれるものは大きく二つに分かれます。生物学的性差と、われわれがジェンダーと呼んでいる、文化的・社会的性差です。生物学的性差は、自分の意思で選んだわけではない、生まれた時から決まっているものです。文化的・社会的性差は、長い年月をかけて、文化圏、社会、国で培われてきた、「男らしさ」「女らしさ」の定義のことです。これは社会の中で広く共有されている考え方で、各社会・文化圏での性役割への期待です。男であればこういう役割を担って欲しい、女であればこういう役割を担って欲しい、という考え方は、それぞれの社会文化圏で異なっています。例えば、長らく日本では—今も残っているかもしれませんけれども—女性は結婚をしたら家庭に入って、専業主婦になって家事と子育てをする、という考えが根強く残っていました。それは、女性は結婚したらこういう役割を担って欲しいという期待がそこにあったからで、他の社会文化圏に行ったら、そのような価値観は共有されていないかもしれません。それが日本特有のジェンダー認識ということになるわけです。いろんな所で、「男らしい人」「女らしい人」とは、こういうものだ、こうあるべきだ、という考えが反映されてい

●「男・女らしさ（ジェンダー）」とは？

性差 ＜ 生物学的性差（sex）
　　 ＜ 文化的・社会的性差（gender）＝各社会・文化圏での性役割への期待
　　　　（「男（女）らしさ」の定義）

→sex の違いは行動を一定程度規定するかも知れないが、それを既存の権力関係の正当化に利用すべきではないというフェミニズムの批判

て、それに基づいて社会の価値観はできています。生物学的性差は、手術によって換えることは可能かもしれませんが、生まれた時に決まっているものです。しかし、ジェンダーは、人間が長い年月をかけてつくり出してきたものなので、その認識が変わっていくことも考えられるわけです。

生物学的性差に基づく違いには、例えば、男性の方が筋力が大きいといったような生理学的なものもあります。だからといって、女性を劣ったものとか、弱い者と位置づけて権力関係を決定するのは間違いである、というのが男女同権論者いわゆるフェミニズムの人たちの主張です。生物学的性差は、行動を一定程度規定するかも知れないけれども、それを既に存在している社会の、一般的には「男性が上で女性が下」という権力関係の正当化に利用すべきではないと主張しているんですね。例えば、日本で「男らしい人」「女らしい人」、見た目でも何でもいいんですけど、こういう見た目の人が男らしい、かっこいい人、イケメンな人、こういう女性が美人で綺麗な人、という定義が、他の社会文化圏で

は全く通用しないかもしれません。あるいは逆もまたしかりです。アメリカや中東やヨーロッパやアフリカで、男らしい人、女らしい人と定義されているものが必ずしも日本でも通用するとは限りません。そんな、いろんな違いを認識していないがために、いろんな紛争が起こってしまうということがあるわけです。ジェンダーというものが、文化的、社会的に構築されてきた性差であるということを、まず確認しておきたいと思います。

ジェンダーを確認したうえで、ジェンダーをめぐってどういう問題が起こっているのかを見ていきましょう。国際関係論に関係なく、一般的なレベルでジェンダーにまつわる論争を次のスライドで見てみたいと思います。わかりやすい例をいくつか挙げています。例えば日本で、お母さんが、泣いている小さな男の子に「男の子なんだから泣くんじゃありません」と言っている光景を見たとしたら、日本のジェンダー認識の中に「男は泣くべきではない」という考え方があって、それが反映されているということです。それから、みなさんの中にも一度は言われたことがあるかもしれません。誰かがやんちゃな女の子に「女の子なんだからもっとおしとやかにしなさい」と言っていたとすると、「女の子は大人しくしているべきだ」という価値観が日本のジェンダー認識だということです。もちろん時代と共に変わってきているかもしれませんし、「いろんなタイプがいてもいいじゃない

か」と、より寛容になってくれれば、そのような叱り方はなくなってくるかもしれません。もし依然としてこのような言葉が広く聞かれるのであれば、ジェンダー認識が根強く残っていると言うことができます。

それから、最近、紛争地で特に問題になっているのが女性兵士の存在です。実際に銃を持って戦う、特にシリアの内戦ではたくさんの女性兵士が戦っていることが、いろんなニュースで報じられていました。あるいは、男性が中心だった格闘技の世界にも女性が入ってきて、男性と同じように殴り合ったりするような職業の人たちも増えています。一方で、男性では専業主夫ですね。女性が働いて男性が家事をする。これもゆるやかにですけど増えていますが、社会全体でそういう男性は依然として少数派ですし、ネガティブに見られている側面も多いんじゃないかという気がします。その辺りはどうでしょうか。私のクラスで聞いてみたら、女性からは「男性だったら働いて欲しい」という意見が多かったので、専業主夫は、まだ広く受け入れられているとは言いがたいと思います。家庭の大黒柱として働いて、主たる収入源になって欲しいと期待されていた時代が長く続いたからかもしれませんが、男性女性関係なく、それぞれの家庭が決めるべきことだということが広まっていけば、それも時間によって変わってくる側面かもしれません。

それから「大和撫子（やまとなでしこ）」という言葉も例として挙げたいんですけれども、みなさんはこの言葉にどういうイメージを持つでしょうか。良いイメージなのか、悪いイメージなのか。女子サッカーにも「なでしこジャパン」とありますから、悪いイメージはないかもしれませんが、そもそもどういう意味なのか、知っている人はあまりいないかもしれません。国語辞典で大和撫子を調べると「日本女性の清楚な美しさを褒めていう言葉」とあります。ポイントは「女性」と書いてあるところです。「清楚な美しさ」は性的に純潔なイメージのことだと思いますが、この清楚という言葉がなぜ女性に限定されて使われるのかということです。清楚なお嬢さまとは言いますが、清楚なお坊ちゃまとは言いません。やはり、日本において、女性に期待されているものが男性とは違うということが、そこには反映されています。女性ならば清楚であって欲しいという願望が現れているんですね。例えば、有名人に性的なスキャンダルが起きた時には、男性より女性の方がバッシングされる傾向にあります。女性はこうあるべきというジェンダー認識を裏切ってしまった人、その価値観に逆らうような行為をした人に強いバッシングが向けられるのは、もちろん男性のスキャンダルも許されているわけではないと思いますが、女性に対してより厳しい基準が適応されているからだと考えることもできます。

それから、近年、いろんなところで取り上げられていますＬＧＢＴＱいわゆる性的少数者、セクシャルマイノリティーの方たちの問題もあります。なぜ今まで性的少数者の方々が差別を受けてきたかというと、先ほど見てきたジェンダー認識ですね。男性はこうあるべき、女性はこうあるべき、その、男らしさ、女らしさの定義に外れていると社会の多数派に見られてきた人たちは、外れているがゆえに、多数派ではないがゆえに、差別をされてきたという現実があります。まさにこれもジェンダー問題の大きなトピックだと言えると思います。近年はその論調が大きく変わってきていて、今まで認められてこなかった性的少数者の方たちも法的な権利を得られるようになってきています。時代と共に考え方も変わってくると言えると思いますが、そこで、私が非常に象徴的な出来事として関心を持っていたのが、アメリカでのある議論です。

これは二〇一一年、一〇年以上前の話しです。アメリカのアイオワ州で同性婚が議論されていました。オバマ政権の時に連邦最高裁は同性婚を合憲であると認めたんですが、特に保守的な州では否定的な考えがまだ根強く残っていたんですね。アメリカでは国の憲法とは別にそれぞれの州で定めている州憲法があるんですけど、アイオワ州の保守派勢力が、州に、憲法で認められた同性婚に反対する法案を出してきたんです。その人たちの主

張としては、子どもたちに悪影響を与える、同性カップルが里親などで子どもを引き受けた場合に、その子どもが学校でいじめられる、道徳的に悪影響がある……、そういう考え方です。そして、それに対していろんな反対運動も起こりました。その時に、当時十九歳のアイオワ大学の学生だったザック・ウォルスという学生が州議会でスピーチをしたんですが、その時の様子がいろんなＳＮＳでシェアされて話題になりました。彼は同性カップル、お母さんが二人いる家庭で育った青年でした。同性婚に反対の人たちは、同性カップルによって育てられた子はモラル的に悪影響があるし、教育上も悪影響があると主張していたんですが、そこにザックが出てきて、自分は十九年間、同性カップルに育てられたけれども、自分の人格は歪んでないし、何の悪影響もないというスピーチをしたんです。時代の流れと共に、かつては全く受け入れられなかった主張が多くの人の共感を呼んだということです。参考までに、彼が州議会でどんなことを話したのか、みなさんに見ていただきたいと思います。

議長さん　どうもこんばんは

私はザック・ウォルスです

六世代目のアイオワ州の人間で
アイオワ大学の工学部の学生です
私は二人の女性に育てられました
私の生物学的な母テリーは人工授精での妊娠に
成功したと私の祖父母に伝えました
祖父母はその時は認めてくれませんでしたが
私が生まれてから
祖父母は私の幼児期の可愛さにイチコロにされ
孫が出来たことを喜んでくれました
残念ながら祖父母は亡くなってしまったので
母が十五年間連れ添ってきたパートナーの
ジャッキーと二〇〇九年に挙げた結婚式に
参列することはできませんでした
私の唯一の妹は一九九四年に生まれました
妹と私の（精子の）匿名ドナーは同じ人物なので

私たちは完全に兄弟なのです
それはとても素敵なことだと思っています
ここで言いたいことは
私たちの家族は他のアイオワ州の家族と
何も変わらないということです
教会にも行きますし
ディナーも食べに行きますし
休みの日に出かけたりもしますし
ケンカした時はとても大変です
（他の家族と何ら変わりありません）
母テリーは二〇〇〇年に多発性硬化症
というひどい病気になり
車いすでの生活になり大変な日々を過ごしました
しかし私たちはアイオワ人ですから
誰かが私たちの問題を

解決してくれると考えたりせず
自分たちの問題は自分たちだけで向き合って戦います
政府に望むのは平等でフェアに
扱われたいという事だけです
アイオワ大学では同性愛者の結婚が講義の
ディスカッションのトピックになることがあり
果たしてゲイ（同性愛者）に子どもが育てられるのか
という議論になります
その度に学生は沈黙します
誰も答えを知らないからです
ですから私は挙手して
「僕はゲイ（同性愛者）のカップルに育てられて
元気にやっています」と言います
ＡＣＴ（大学での成績）で上位九九％の
点数を取ることができました

僕はボーイスカウトのメンバーです
小さなビジネスも始めました
議長さん　もし私があなたの息子だったら
あなたは私を誇りに思ったことでしょう
私はあなた方のお子さんと何ら変わりはありません
私の家族はあなた方の家族と
何ら変わりはありません
家族の価値は政府から結婚を認められ
祝福される事で強くなるわけではありません
家族だという気持ちは
つらい時を共に乗り越え
楽しい時を共に喜ぶためにお互いに
関わり合うという意思から生まれてくるものです
家族だという気持ちは　お互いを結びつける
愛の気持ちから生まれてくるものです

それこそが家族というものなのです
あなた方がこれから投票する結果は
私たちや私の家族を変えるものではありません
私の家族が法的にどのような存在であるか
法律がどう私の家族を扱うか　が変化するのです
あなた方の投票が　州の歴史上で初めて
差別を明文化して州憲法にするかもしれないのです
今回の修正がなければ　この州憲法はアメリカの中で
最も修正が加えられていない憲法です
あなた方はアイオワ州の人に向かって
「あなたの中に二流の市民がいます」
「彼らには好きな人と結婚は許されません」
と言っているのです
あなたの投票結果は
私の家族に影響を与えますか？

あなたの家族には影響を与えますか？
これから二時間　両親がゲイ（同性愛者）であることが
子どもにどれだけ有害であるかが
沢山証言されると思います
しかし私が生きてきたこの十九年間これまで一度たりとも
私がゲイ（同性愛者）のカップルに
育てられたことを感づかれて
そうなのかと聞かれたことは　ありません
なぜだか分かりますか？
それは私の両親の性的な指向は
私の人格に全く影響がないからです
どうもありがとうございました

ザックのスピーチを聞いていただきました。時代と共に変わってきていることが非常に印象的なんですね。数十年前であればとうてい受け入れられなかったような主張が、今で

は多くの人たちの感動を呼んでいます。時代と共に価値観も変わっていて、ジェンダー認識も、いろんな人たちが問題提起することによって、いろんな人たちが考え直した結果として変化が起こっています。ジェンダーを考えるうえで他にもキーワードがありますので、それもいくつか確認しておきましょう。

まずは、フェミニズムという言葉です。定義としては、女性の社会的、政治的、経済的権利を男性と同等にし、女性の能力や役割の発展を目ざす主張および運動。女権拡張論とか、女性解放論、アメリカではかつてウーマンリブと呼ばれた運動です。ただ、フェミニズムにはいくつか考え方の相違もあります。今まで男性が主流だった場所にどんどん女性が入っていくことは良いことだから、女性に門戸を閉ざしていた分野があるのなら、制度上どんどん開放されていくことを積極的に奨励すべきと考える「リベラル・フェミニズム（制度的改善）」と、それだけでは不十分で、もっと根本的なところから変えないといけないという「ラディカル・フェミニズム（根本的変化）」です。例えば、今まで軍隊にはいろんな制約があって女性が就くことを禁じられている任務もあったんですけど、それが今どんどん変わってきています。米軍であれば、かつて入れなかった特殊部隊も制約がどんどん取り払われている現実もあります。軍隊に限らず、今まで入れなかった分野に女性が

どんどん入っていっています。

日本では、国技である相撲で、女性は土俵の上に立てないというしきたりが残っています。宗教上、女性が入れない女人禁制エリアも日本国内にはいくつかあります。それは伝統として尊重しなくてはいけないものなのか、考え方がすでに時代遅れで、長い伝統だとはいえ変えていかなくてはいけないものなのか、人によって考えは異なるかもしれません。

リベラルな人たちは、今まで入れなかった所にどんどん女性が入っていくことを肯定的に捉えるべきだという考え方ですが、ラディカルな人たちは、例えば、軍隊という組織自体が男性優位の価値観にたっているなら、いくら数が増えたところでそこにいる女性は男性優位の価値観に染まってしまう、組織の体質そのものから変えなきゃいけない、という考え方です。女性が今まで充分な教育を受けられなかった地域、女性に教育は必要ないと長く考えられてきた地域において、そこに女性が通えるようになるということを肯定的に見るべきというリベラルな考え方と、その学校で教えられている内容が男性優位の価値観に基づいた教育内容であるならば、結局、男性優位の価値観の再生産になるだけだと、そもそも教育内容、教師、教科書、プログラムに至るまで根本的に変革しなければいけない

というラディカルな考え方があるわけです。フェミニズムの中にもいろんな議論があって、どこを最終目標として目指すかで異なっているという側面があります。ただ、女性が男性と同等の権利を持てることを目標にしているという意味では、フェミニズムは同じものだということです。

続いて、フェミニズムが乗り越えるべき伝統とみなす「家父長制」について定義を確認しておきたいと思います。家父長制は別名「父権制」とも呼ばれます。フェミニズムはこれを乗り越えることを目標にしています。百科事典でどのような記述になっているかというと、

家長たる男性が権力を独占し、父系によって財産の継受と親族関係が組織化される家族形態にもとづく社会的制度。父権制ともいい、英語では patriarchy。国家体制が家父長制的家族形態に擬せられることも歴史上多く見られる。フェミニズムの立場からは、女性を抑圧しつづける権力構造であり、性差別を生み、助長してきたとされ、フェミニズムはこうした状況を打破し、変革する運動と位置づけられている。

別の記述では、

家族におけるいっさいの秩序が、最年長の男性がもつ専制的権力によって保持されている場合、こうした家族は〈家父長制家族 patriarchal family〉とよばれる。家父長は、奴隷ばかりでなく妻や子どもに対しても（極端な場合）生殺与奪を含めて無制限で絶対的な権力をふるう。家族内のいっさいの権威は家父長にのみ帰属する。

とあります。もちろん現代、特に先進国でこのような露骨な権力関係が残っている所はないかもしれませんが、フェミニズムが問題としているのは、精神的なレベルではまだ残っているということです。女性が、父親や最年長親族として引き継ぐ立場にある男性の言うことを聞くべきだという考え方は、特に地方などに根強く残っていて、女性の権利が制限されていることを問題視しているわけです。時代は変わっても、考え方、価値観がまだ残っている、それを乗り越えないといけないという立場に立っているのが現代のフェミニズムです。

家父長制、父権制の意味を確認したところで、次に、国際関係論（ＩＲ）の分野でフェ

ミニズムがどのような議論を展開しているのかを見ていきたいと思います。まず、主流の伝統的な国際関係論では、「男らしさ」を重視してきたとフェミニズムは見ています。政治の世界での敵に対する姿勢として毅然としていなければいけない。たくましい、男らしい、といった属性、勇気、権力、独立、といった言葉が肯定的に捉えられていて、逆にそれとは反対の、弱さ、優しさ、感情的、といった言葉は否定的、ネガティブに捉えられてきた、と言っています。肯定的に捉えられてきたたくましさ、勇気、権力、独立は「男らしい」言葉として位置づけられることが多くて、政治の世界ではマイナスだとされている弱さ、優しさ、感情的、と言った言葉は女性と関連づけられることが多かった、と見ているわけです。実際に女性に参政権がなかった時代もありました。女性はすぐ感情的になるから政治には向かない、だから女性は政治に携わるべきではない、と言われた時代があったわけです。例えば、ここに「共和党のオバマに対する批判」と書いていますけれども、アメリカの前前大統領のオバマさんは、度々テレビカメラの前で涙を流した大統領です。それは歴代の大統領を見ても珍しいと思うんですけれども、そういうオバマさんに対して野党の共和党から、世界最強国アメリカのトップである大統領が弱腰を見せるべきじゃない、涙を見せるべきじゃない、という批判も起こりました。女々しいと。女々（めめ）し

いという言葉も女という漢字を二つ書きますから、女性を低く見るところから生まれたんでしょうけれども、女々しい姿勢をアメリカの大統領が見せるべきじゃないと主張した人たちがいたわけです。政治のトップに立つものは男らしいところを見せなければならない。相手に付け込まれない姿勢を見せなければいけない。そういう価値観を上位の価値観として位置づけているわけです。そういう今までの主流を、フェミニズムは批判的に見ているんですね。実際にどのような議論を展開しているかというと、

主流の国際関係論がイメージする男性的価値観は現実の男性像に基づいてはおらず、イデオロギー（社会の権威関係を固定化するもの）にすぎない

と批判しています。現実は、必ずしもそのような高い評価を受ける属性を持っている男性ばかりではない。そうあるべきだと言っているだけで、現実にはなっていない。それは理想であってイデオロギーである。その理想に基づいて、男性が上、女性が下、と社会の権威関係を固定化するのは間違っている、という批判です。フェミニズムは、今まで主流だった国際関係論が重視してきた考え方によって、かえって争いが起こりやすくなり、最悪

の場合、戦争にまで発展するという側面があると批判をしているわけです。

それでは少しまとめます。ここまで、戦争の現実、戦争の被害が一番非力な人たち、特に女性や子どもに集中している現実があること、そういった現実にジェンダーの観点から様々な見直しが行われているということ、見直しがされる中で、フェミニズムという一つの有力な観点がある、という話をしてきました。

そして今日は最後に、人間の暴力についても考えてみたいと思います。戦争は暴力の最高の形態ですから、戦争も含めての話しになりますが、キーワードの「構造的暴力」がどういうものなのか、その概念を知って世の中の見方がどう変わるのか、みなさんに考えてもらいたいなと思います。

これが「構造的暴力」の説明スライドになります。ヨハン・ガルトゥングというノルウェーの有名な国際政治学者が暴力の概念をいくつか分類しているものです。私たちは「暴力」と聞くと、直接的（物理的）暴力、例えば、殴る、蹴る、暴言といった、人間の五感で知覚できるものを真っ先にイメージすると思います。実際、殴ったり蹴ったりしている人は目で見えますし、暴言は耳で聞こえますから、誰がそれを行使しているのか、加害者を特定しやすい、といった特徴があるもので、説明されるまでもない、我々が一般的に持

っている暴力のイメージです。ところが暴力はそれだけじゃないんだと言っているんです。

まず「構造的暴力」は、現実に存在する貧困や差別を、固定化・正当化する法・組織・伝統・慣習のことで、実際に目には見えないけれども暴力に含まれると言っています。これは直接的暴力と違って加害者の特定が困難です。例えば、貧困がいつになっても改善されない、経済格差が広がり続けている、差別がなくならない……。でも、それが誰のせいなのか、名指しで「この人が悪いんです」と言うことが難しいですよね。社会全体でそういう構造を残していると考えるならば、社会全体の責任と言えるかもしれません。人権侵害の具体例としては、例えば、教育を受ける権利の剥奪です。世界には女性に教育は必要ないと考えている地域もあります。そこでは女の子たちが充分な教育を受けられず、貧困から抜け出せず、という悪循環に陥っています。それからまた後でも説明しますが、名誉殺人という慣習が残っているところがあります。自分で結婚相手を決めることができない女の子が、自分が決めた相手と結婚しようとしたり、駆け落ちをしたり、結婚前に性的交渉をしたりすると、一家の恥であると見なされて、家族の、主に父親の手によって殺されるという慣習です。あるいはインドにダウリー死というものがあります。これは、婿側の

■構造的暴力とは？

暴力
- 直接的（物理的）暴力
  ＝殴る・蹴る・暴言など五感で知覚できる暴力。加害者を特定しやすい。
- 構造的暴力
  ＝目には見えないが、貧困や差別を固定化・正当化する法・組織・伝統・慣習など（加害者の特定困難）
  ex.
  ・人権侵害（教育を受ける権利の剥奪、名誉殺人、ダウリー死など）を許す制度や慣習
  ・貧困や差別や経済的格差を放置・悪化させる制度　など
- 文化的暴力
  ＝直接的・構造的暴力を正当化し、暴力に対して無感覚にさせる価値観（加害者の特定困難）

cf. 女性イスラム教徒のブルカは構造的暴力？日本の着物は？

家族が花嫁の持参金が少ないと不満を持った時に花嫁が殺されてしまうというものです。もちろん、殺人となれば直接的暴力ですけれども、このように、制度のせいでいろんな権利や自由が制限されている、慣習や伝統が残っているせいで女の子が自由に恋愛をすることができない、選んだ相手と結婚することができない、教育を受けることもできず、萎縮して家に籠もってしまう、という状態があるなら構造的暴力だと呼べるということです。貧困や差別や経済的格差を放置・悪化させる制度です。先ほど「固定化・正当化」と言いました。すでに存在している格差や差別を、このままでいいんだと、間違ってないんだと正当化する。そういって正当化する人たちを守る法律、そういったことを率先してやっている組織、伝統や慣習があるのであれば、総称して「構造的暴力」と呼べるということだと思います。

最後に「文化的暴力」です。目に見えないという意味では構造的暴力と同じですが、法、組織、伝統、慣習と形になっている構造的暴力と違って、これは、それぞれの個人の頭の中にある価値観レベルの話です。直接的暴力と構造的暴力を正当化する。自分たちが大事にしてきた伝統なんだからと正当化する。その暴力を、間違ったことではないと、改善しようとする動機が生じないような状態のことです。暴力に対して無感覚にさせる価値観のことを指しています。そして、構造的暴力と同じように加害者の特定が困難であるという特徴があります。

この構造的暴力と文化的暴力だけでは難しいかもしれませんので、分かりやすい例を見てみましょう。まず、直接的暴力は、紛争地帯だったり、貧困に苦しんでいる人たちがたくさんいるところで子どもが死んでしまう、あるいは殺されてしまうということが起こった場合です。構造的暴力は、治療すれば助かっていたはずなのに貧困のせいで死んでしまうという状態がずっと続いている、そして、それを固定化するような伝統や慣習や制度がある場合です。さらに文化的暴力は、そこに住んでいる人たちの価値観として、子どもが死んでしまったことを、仕方がない、よくあることだから改善しようとも思わない、外の世界から見れば明らかにおかしいようなことでも、子どもが死んだという現実を正当化し

て、それに対して何も感じない状態を指して言っています。もちろんこれには主観が入ってしまうので、誰から見ての構造的暴力なのか、どの観点から見ての文化的暴力なのか、という問題もあります。ある人にとっての構造的暴力や文化的暴力が、別の人からみれば暴力にならないということもあり得ます。ただ、殴ったり、蹴ったり、暴言を吐くわけではないけど、これは明らかに、間違いなく暴力だと、暴力として見なくてはいけないと、世界中の多くの人が声を上げるのであれば、暴力であると見なされていくということです。その話の関連で先ほどのスライドに戻りましょう。

イスラム教徒の女性が着ている全身を覆うような服（ブルカ）の場合です。それに対して欧米側から女性の自由や権利を制約するものであるという批判を向けられたとして、ではそれが女性に対して構造的暴力になっているのかということです。イスラム教徒側からは異論が出てくるかもしれません。あるいは日本の着物です。着物は女性の身体のラインを消すように作られていますけど、それを欧米的な価値観で、女性の自由を制約するものである、女性に対する構造的暴力である、という言い方をされたら、日本人として違和感があるかもしれません。先ほども言ったとおり、何を持って、誰の立場から、構造的暴力、文化的暴力と言えるのか、解釈が異なる可能性もあるということです。ただ、名誉殺

人とか、ダウリー死のように、明らかにおかしい、そういう制度が残っているせいで女性が萎縮してしまって、生きたいように生きられない現実があるのであれば、それは暴力と言わざるを得ないという考え方が非常に強くなってきています。

こういう慣習は元々、何十年、何百年も前からあるわけですが、なぜその考え方が今になって問題にされるようになってきたかというと、ジェンダー認識が変わったからです。現実は変わってなくても、認識が変わったから問題として取り上げられるようになったということです。最初に見たジェンダーのところを思い出してほしいんですが、生物学的性差と、社会・文化的性差、後者をジェンダーと呼ぶと話しましたよね。生物学的性差は簡単には変えられないけれども、ジェンダーは人間の認識で大きく変わることもあり得ます。今まで声を上げなかったいろんな人たちが、これからは声を上げていこうと、いろんなところで新しい動きをはじめた結果として、今までおかしいと思われなかったけれども、「やっぱり、おかしい」という声が、だんだん共有されていって世界で広がっていったということです。

この概念を踏まえたうえで、さらに深く、平和というものについて考えてみたいと思います。平和を、構造的暴力という考え方から見直してみようというものです。普段はあま

り考えない、当たり前のこととしている「平和」について、立ち止まって考えてみましょう。私たちはすでに構造的暴力と文化的暴力を学びましたから、その観点に立って平和を見直してみます。

「平和」を国語辞典で調べたら対義語には「戦争」とあります。逆に戦争を調べると対義語は平和と書かれています。ですから、国語辞典的な定義では、平和は「戦争がない状態」だといえるわけです。ところが、実際に戦争が起こっていなかったとしても、暴力が残っているのであれば本当の意味での平和とは呼べないんじゃないかという、そういう問題提起があります。ですから、ここでは戦争がない状態という意味で「消極的平和」と呼びました。他方で、国際法上の戦争は起こってないけれども、とてもじゃないけれど平和とは呼べない状況は多々あります。平和で安全だといわれる日本でも差別や格差はたくさん存在しています。そこで、そういった構造的暴力、文化的暴力がすべて取り除かれた状態を「積極的平和」と呼んでいます。究極の理想です。あらゆる格差、貧困、差別が全て取り除かれた状態は遠い将来にも現実にはならないかもしれません。ただ、戦争が起こっていないというだけで満足するんじゃなくて、あらゆる暴力を取り除く努力をしてはじめて、本当の意味での平和を目指していると言えるという考え方がここには反映されていま

す。

確かに戦争は起こってない。でも、名誉殺人やダウリー死が残っている地域に生きている女性たちが、果たして平和な状態で生きていると言えるのか、と考えた場合、必ずしもイエスと言えないわけです。この、文化的暴力、構造的暴力、あるいは、消極的平和、積極的平和という分類が、現実を見る新しい視点を提供してくれる。こういった概念を知ることで、今まで当然のように考えてきた現実、特に問題とも思ってこなかったようなことが、やっぱり、ちゃんと解決しないといけない問題じゃないのかな、というふうに考え方が変わってくるということです。新たな視点を取り入れることによって現実が違って見えてくる。これが構造的暴力と平和の関係です。

では、先ほど後で詳しく話しますと言った、名誉殺人についてもう少し詳しく見ていきましょう。こちらが名誉殺人の定義のスライドになります。

女性による婚前の恋愛や性交渉、親が決めた相手以外との結婚や駆け落ちは許されざる行為で家族の恥であると考える地域において、家の名誉を汚した娘が家族の手で殺される慣習。殺した男性は「英雄」扱いされる。トルコ、パキスタン、インド、アフ

ガニスタンなどの一部の地域で今も残っており、年間六、〇〇〇人以上の少女が犠牲になっている。

もちろん、これらの国々の中央政府は、そういった伝統や慣習を法律で禁止してはいるのですが、中央の意向が及ばない地方などでは残っているところもあります。国連などで取り上げられることになって徐々に減ってきているとはいえ、完全にはなくなっていません。殺人自体は直接的暴力だけれども、そういう制度が残っていることによって様々な自由や権利が制限されている状態は構造的暴力です。実際にこの名誉殺人は、いろんな番組でも取り上げられているんですけれども、かつてＮＨＫが特集で取り上げたことがあったので、その番組の宣伝の部分、冒頭だけちょっとご覧下さい。

（映像）

映像で名誉殺人がどういうものなのか見てもらいました。名誉殺人だけじゃなくて様々な伝統や慣習、ジェンダー認識の中で、女性は男性に逆らうべきではないという価値観が

根強く残っている地域では、結婚相手も父親に従わなくてはならない。それに逆らった女性がひどい現実を突き付けられているということです。

今見てもらっている記事はアフガニスタンの例です。結婚を申し込まれて拒否した女性が、その相手の男性が所属している武装集団から顔に硫酸をかけられて重傷をおったという記事です。これは二〇一一年の話しなので一〇年以上前ですけれども、最近でもいろんなことが起こっていています。例えば、こちらはインドの記事です。ＮＨＫのサイトに載っていたんですけれども、二〇一九年です。性的暴行を受けた女性が、それを裁判に訴えようとして裁判所に向かっている最中に全身に火をつけられて殺されたという事件があったんですが、その事件に対してインド国内で女性を中心に抗議活動が広がっているということを報じています。我々のような平和で安全な先進国で過ごしている人間にとっては信じられないような現実が、実際に世界各地で起こっている。そういう現実を直視しないといけないということです。

それからもう一つ、これはアフガニスタンの例です。去年、アフガニスタンでタリバンが復活したとニュースになりましたが、そのタリバンの元で、再び女性が様々な権利を制約されているということが、いろんなところで報じられましたので、こちらもご覧下さ

い。

（映像）

これで最後になりますけれども、ジェンダーと戦争の関係の例として取り上げたい記事で、最近、女性兵士が増えているという話です。先ほど、女性兵士が増えていることを肯定的に捉えるとか、それだけでは根本的な解決にはならないとか、フェミニズムの中でも考え方に対立があるという話をしましたよね。男性が中心だった軍隊という組織で女性構成員の割合が増えていることを男女平等とするのか、軍隊そのものが男性優位の価値観に染まっているので、いくら多くの女性が入っていったとしても根本的な解決にはならないというラディカルな考え方に立つのか。

今見てもらっているのは、二〇一六年の朝日新聞のシリア内戦を報じる記事です。シリアでは女性兵士が増えていて、このように銃を持って戦っています。そして、これはアメリカです。軍隊には女性が比較的入って行きやすかった場所と、厳しく制限されていた分野があって、それが戦闘任務だったんですが、今は人手不足ということもあり、女性であ

っても戦闘任務に向いている人、才能のある人はどんどん入ってきてもらうという動きも進んでいます。今までは女性にはあまりにも過酷すぎるということで制限されていた分野で、どんどん扉が開かれて、そこに入っていく女性も増えています。これが男女平等の一つの現れなのか、そうではないのか、様々な意見があると思います。これも戦争とジェンダーに関わる重要なトピックの一つです。

そして自衛隊の話です。実際に日本の自衛隊でも様々な変化が起こっています。今まで女性が入っていなかった分野に女性が入っていく。これは、二〇二〇年、それまで女性がいなかった空挺部隊、パラシュート部隊に女性が入ったことを報じる産経新聞の記事です。それまでは厳しい体力テストがあってクリアできる女性がいなかったんですけど、初めてクリアした女性隊員が誕生したということを報じています。これは陸上自衛隊の話ですけれども、海上自衛隊でも大きな変化が起こっています。二〇一九年の産経新聞、イージス艦の艦長に初めて女性が就任したという記事です。ミサイル防衛など、安全保障上の重要な任務を引き受けているイージス艦の艦長に女性が就任したということで非常に大きく報じられました。

こういった、軍隊、自衛隊という組織でも大きな変化が起こっています。それを我々は

どういうふうに考えたらいいのか、もちろん様々な意見があると思いますが、ジェンダーという観点から見ることによって、今まであまり問題視されなかったことが新しい問題としてクローズアップされてきているということです。

本日の講義では、ジェンダーという観点から戦争の現実についていろいろ考えてきました。さらには暴力というものについて、平和というものについて、より深く考えてきました。我々のように平和で安全な日本で暮らしていると、暴力とか、平和とか、そういったものについて深く考えずに、どちらかというと建前の話だけで終わっているところもあると思います。より深く考えてみることで、自分たちにとっては当たり前だと思っていること、自明だと思っていることでも、それは偶然に起こっているんだと、当たり前の事じゃなかったんだ、ということに気づくと思います。今回の講義を通して、みなさんにも新たな気付きや、関心が喚起された部分があると思いますので、自分の関心に応じて、図書館でなり、文献などリサーチをしてみてください。さらに自分で勉強して、知識の幅も広げていってください。では、本日の講義は以上になります。ご静聴ありがとうございました。